



Title	武田泰淳『非革命者』論
Author(s)	松本, 陽子
Citation	阪大近代文学研究. 2005, 3, p. 59-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92632
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

武田泰淳『非革命者』論

松本 陽子

はじめに

敗戦後、上海から引揚げた武田泰淳は、自身の実体験に基づき、〈杉〉という主人公の名称や設定が共通する〈上海もの〉と呼ばれる一連の作品を発表する。その一つである『非革命者』（『文芸』一九四八・五）は、これまでの研究史において未だ詳細な作品分析がなされておらず、作家論的視点から概括的に捉えた先行論や、他の〈上海もの〉作品との関連を論じた先行論が散見されるのみである¹⁾。かつては語り手の言葉に初期武田の苦悩が直接的に重ねられ解釈される傾向にあった〈上海もの〉作品研究に対して、主人公〈杉〉の系譜を明らかにした山崎正純の論考²⁾は注目すべき点が多い。しかしこれまでの本作に関する先行論においては、概括的な捉え方ばかりが先行し、小説の構造の把握が疎かにされてきたことも否定できない。したがって本論では、これら先行論で示された本作の位置を参照しつつ、〈私〉（Ⅱ）〈杉〉

の語りに着目し『非革命者』の構造を考察する。

日本敗戦直後の上海「日僑集中地区」に身を置く〈私〉（Ⅱ）一人称の語り手）が直接見聞きした出来事と心象の描写からなる本作は、大きく次の二つの枠組みからなる。

まず一つ目は、「理想もない。力もない。何か行動する意慾さえありはしない」と自己規定し、ことさら低い位置に自身を位置づける〈私〉の〈恥〉の意識である。作中では〈私〉が何故〈恥〉を感じるのか、明確な理由説明がなされないまま〈私〉のマイナスイメージのみが重ねられていき、最終的に「革命悲劇」から逃げ戻った〈私〉の「大きなはずかしさの闇」が提示される。

先述した〈上海もの〉作品をはじめとする一九四〇年代後半に発表された武田作品には、しばしば恥辱感、〈恥〉の問題が重要なモチーフとして取り上げられているが、この点をふまえた上で、〈私〉が自身の〈恥〉を如何に語っているのかを確認していく。次の引用は『非革命者』の冒頭部である。

私は日僑集中地区内のブローカーの家にころがりこみ、時たま頼まれる代書の仕事で得た金で、老酒ばかり飲んでゐる男にすぎない。(中略)私は上海ばかりではない、世界のよいけい者である。終戦と同時に、それはきまつた。いや、その前から、それは決まっていたのだ。

《私》が自身を軽蔑し《恥》を感じる理由は、日本の敗戦と敗戦国民としての自身に関わるものとしてではなく、むしろより個人的な問題に起因するものとされている。換言すれば、全編に漂う、自身の存在する根拠や位置を見失つた人物として語られる《私》の空虚感とは、《私》自身に内在する何らかの自己分裂的危機や自己矛盾と関わる問題としてあり、自国の敗戦を旧敵国であり戦勝国である中国で迎えたことに大きな要因があるわけではない。

このように、主人公の内省が戦争を軸とした日本と中国との関わりよりも、主人公自身の心情のありように比重が置かれている点において、本作は、武田独特の滅亡観があらわれていると高い評価を受けた『審判』(『批評』一九四七・四)や『蝮のすえ』(『進路』一九四七・八・十)といった他の(上海もの)作品とは異なっている。こうした本作の独自性をふまえた上で、本論では、作中随所にはめかされる理想や信念を有した《私》の過去と、《恥》を忍ぶ現在との関わりを考察し、本作の構造を明らかにする作業へと繋げていく。

また二つ目は、《私》が想いを寄せる女性が死に至るまで

の経緯、すなわち《私》の悲恋の物語である。《私》が想いを寄せる「M喫茶店の彼女」を美化し語るトーンと、「M喫茶店の彼女」の死に直面することで受けた衝撃の強さを語るトーンとの落差が際立つ構成となっている。

本作は一見、語り手《私》が自らの失つたものを浮き彫りにする結末に向って、「革命悲劇」から逃げ戻つた自身の弱さ、《恥》を批判的、自嘲的に語っているように、或いは、永遠に失われてしまった「M喫茶店の彼女」への想いを感傷的になぞり返し語っているように見える。換言すれば、《私》の上海の暗い残像を写し取つた小説として読めてくる。しかし本作を成り立たせている言葉のあらわれ方を強く意識しながら、同時に《私》の語りを対象化し捉え直そうとする視点から考察を進めることによって、先述した見方とは異なつた、新たな読みの提示が可能となるのではないか。

一

まず初めに、本作における語りの時間に着目する。作品冒頭部の、

・今では、路を歩いて、中国人たちはみすばらしい風態をした私に対して、反感さえ示しはしない。

・今朝は、下の主人が、買いだめしておいた電球をコッソリはこび出している。

といった表現に明らかなように、語り手は作中の出来事を「今」という現在形を用いて語り始め、出来事の進展とそのつどの自身の心情を中心に語っていく。しかし後半に至つて（私）が「革命悲劇」の場面を語る際の、

（彼女はたしかに、兵士を射殺するためより、青年を救うために発射していた。それは乱れ、仕方なしに発射されていた。と私は後に考えたのであるが）

といった表現や、「M喫茶店の彼女」が射殺される場面を語る際の、

兵士の正確な射撃は、息もつかせぬ間に彼女に命中した。（中略）そのよろける身体にまた一発命中した。弾丸の命中する音、その肉に食い入る鈍い音を私は聴いた（と思う）。

といった、括弧を用いた表現があらわれてくる点が注目される。こういった表現を該当箇所の表現とその前後の表現との相違を強調するため意図的に用いられたものと見れば、括弧内の言葉がその前後の言葉とは明らかに異なる視点から発せられた言葉と捉えることができる。また「私は後に考えた」といった表現からは、この括弧内の言葉が発せられた時間が先述した「今」、つまり（私）が上海に残留している敗戦直後の冬という「今」ではなく、時間的には「今」よりも後の時間であることが推測されてくる。こうした本作の構造をどのように捉えるべきであろうか。

「私は後に考えた」、「と思う」といった表現を見れば、語り手（私）が「革命悲劇」の場面を語る際、後の時間において、より正確に回想し出来事を語ろうとする姿勢を見せていることが了解されよう。しかしここで注意しておきたいのは、本作を一読すれば明らかのように、本作の語り手（私）があとにならない感情や感覚の持ち主として造型されている点である。例えば、「革命者」の青年からトランクを預かり「革命」との直接的な接点を持ったことを、「不利な取引をしたと感じた。実に損な、おろかな役割をひきうけたと、後悔」したと語る一方で、自身の身の安全が保証された後「革命者」の青年と接触する際には、「同志よ、と肩をたたかればかりの気軽さで」応じる場面が描かれている。（私）なる人物が、軽佻な人物として造型されていることは明らかである。以上の点をふまえた上でさらに（私）の言葉の用い方、語り方に着目していく。

「革命悲劇」遭遇後の（私）は、恐怖にかられ「日僑集中地区」の自室に走り帰る。自室にたどり着いた（私）の視界から直前まで見えていた「ギラギラする灰白色の光線」（非日常）は消え、次第に「平常の白昼の光線」（日常）が戻ってくる。ここで（私）は同居人の村井によつて日本への引揚げが翌日に決定した旨を知らされる。作中では、（私）の後日談や（私）の翌日以降の引揚げに関する事柄は語られない。しかし作中随所に確認できる（私）の保身、時流に乗るあり

方から察すれば、〈私〉が他の「日僑」と共に内地（日本）へ引揚げたと捉えるのが妥当であろう。

ところでこの引揚げは、外地（上海）から内地（日本）への移動として単純に捉えてよいのであろうか。本作とほぼ同時期に執筆され発表された、他の〈上海もの〉作品を参照してみる。

私は、中国にとどまるつもりだと答えました。日本へ帰り、また昔ながらの毎日を送りむかえしていれば、再び私は自分の自覚を失ってしまうでしょう。海一つの距離ばかりではありません。自覚をなくさせる日常生活がそこに待ち受けているからです。

（『審判』前掲）

とある。別の作品においても「日本へ帰ればすべて忘れる」（『蝮のすえ』前掲）、「日本に帰国して平安をとりもどしてからの牧は、ほとんどその当時の緊張を想い浮かべることが困難なのであった」（『苦笑の前後』「小説界」一九四八・十一、十二合併号）といった記述が見られる。つまり、少なくとも『非革命者』の発表された時期と同時期である一九四〇年代後半の武田にとって、外地（上海）から内地（日本）への引揚げは、過去の記憶の風化や本来緊張を伴うべき何ものかへの「自覚」を喪失させる性質を伴った、非日常から日常への移動として意味付けられているのである。本作の場合、日常（内地、日本）へ回帰した〈私〉が非日常（外地、上海）を忘却していないことは明らかである。しかし、先述したよ

うな武田作品における引揚げの意味するところを考え合わせれば、〈私〉の意識や「自覚」のありように生じる変化を完全に否定することは難しいのではないか。

以上、〈私〉の語り方や時間的経緯のあらわれ方に着目してきた。先述したように、「革命悲劇」の場面を語る際に限定して括弧を用い、その中に挿入する形ですべてが終った後の時間の認識を顕在化させることによって、「革命悲劇」に向けられる〈私〉の思いの強さが強調されていることは明らかであろう。しかし一方で、内地（日本）への引揚げという設定が付与されることによって、〈私〉の過去を相対化する視線の弱さがあらわされてもいる。とすれば本作は、この物語を語る〈私〉の意識や「自覚」のありようの変質を意識した上で、〈私〉の言葉を相対化する視点から読まれるべき小説であることが了解されよう。

本作は一見、恐怖によつて「革命」から逃げ出した「非革命者」Ⅱ〈私〉の〈恥〉を描いた、自己告白調小説であるかのように見える。しかしこれまで述べてきたように、本作に内在するこうした語りの構造をふまえれば、語り手〈私〉が自身の意識や「自覚」のありようを十分に把握、理解しないまま語ってしまう語り手として造型され、特徴づけられているのではないかと見なすことができる。こうした本作の特徴は、この小説の戦略性を意識させる手がかりとなつている点で重要と思われる。表立って強調されている内容とは別の角

度から、〈私〉の言葉を捉えさせる手がかりと見る事が可能なためである。以上の視点から、次章では〈私〉自身に内在する空虚感と「革命」との関わりを作中の〈私〉の言葉から辿っていく。

二

小説が展開するに従って〈私〉の生きることに対する苦悩が明らかにされていく点を見れば、〈私〉が単なる無恥感覚の持ち主、無為のままに沈淪する人物として造型されているのではないことが分かる。しかし作中では〈私〉の過去に関わる具体的な説明が付されていないために、〈私〉が如何なる経歴を持つ人物であるのかが曖昧であり、〈私〉の言葉の裏に事情を読み取らせるものとなっている。

〈私〉は作中で、自身と「革命」は無縁であることを繰り返し強調し、余計者意識に苦しむ無為の人物、自己を定位させることができないでいる人物として自身を語っている。しかし作中には、そういった態度に徹しきれていない、〈私〉の揺れを覗かせている箇所を見ることが出来る。〈私〉を「革命者」であると誤解する「革命者」の青年が〈私〉の自室を訪れる場面である。

無条件に「革命者」として〈私〉を「信頼」する「革命者」の青年の「楽天的なそぶり」に対し、〈私〉は「悲しみとも

怒りともつかぬ」「鈍い苦痛」を感じ始め、さらには「革命者」の青年に対峙する自分自身を「厭悪」し始めたのである。〈私〉の「革命者」の青年に向ける視線が、おのずから自己省察へと動いていることが確認できる。

私はM喫茶店の彼女の、あのたよりなげな、清楚な姿ばかり想いつめていた。そして金、現実私に私の掌中に握られるであろう一定の額の金のことだけに関心を抱いている。それに執着し、吸着している。その他のこと、それに関係のないすべてのことは、私にとつて、色なく、音なく、熱なく、価なきものであつた。そのような状態に固定してしまつた私が、いかにも孤独に、またあまりにも私的であること。それが今この青年の私を信じ切つた態度を見つめていた私の胸に、ハッキリと、白色光に照されたように映し出されて来ていた。そのために私はますます暗い悲哀、冷い悪意の底へ沈んで行く。

また〈私〉は「革命者」の青年に「ありのままで接するより仕方なかつた」としながらも、青年の発した「あなたは、我々を裏切る人物じゃありませんよ」という言葉には過敏に反応してしまう。

「それがどうしてわかる」私は何か悲しみとも怒りともつかぬもの、自分の臍腑を自分でうらがえすような鈍い苦痛にとらわれて、言つた。「どうして君に僕の本心がわかるんだ。君は僕について何一つ知つてやしないじゃ

ないか」

こうした〈私〉の反応をどのように解釈すべきであろうか。

「終戦後も、革命は急激に進行していること、自分たちの非合法の活動がいかに盛んであるか、またいかに危険であるか」を語る「革命者」の青年に対し、〈私〉は自分「以外の人間のために危険な目にあうのは御免」だと答えている。こうした〈私〉の応答を自身の危険を避けるためのものと解釈することもできよう。しかし、〈私〉が営んでいる「中国語の書類を引受ける代書の店」も「革命」と同様、「危険な、非合法な仕事である」ことに変わりはない。〈私〉が「革命者」の青年の言葉に過敏に反応した理由は、青年の関わる「非法運動に対する恐怖」を感じたためや、「革命者」と見なされ捕らえられることを怖れた自己防衛にあったのではない。むしろ〈私〉自身に内在する問題との関わり、換言すれば〈私〉と「革命」との何らかの関わり起因するものではないか。先述したように作中では、〈私〉の過去に関する具体的な説明や、それまでの〈私〉がどのような心理的な葛藤を体験したのかといった経緯が語られていないため、「革命」との関わりも含め〈私〉が如何なる経験や過去を経て現在に至る人物であるかは不明である。

作者武田像をよく知る読者ならば、作品外の知識の導入によつて作者の実年譜を作中人物〈私〉の過去に重ね、〈私〉を左翼運動への弾圧による転向体験者として読むことにもな

るだろう³⁾。また作者武田像をよく知らない読者や、作者と作中人物を切り離して読もうとする読者にとつても、作中の〈私〉が「文化人」として周囲から見なされている点に着目すれば、〈私〉を精神や思想が混乱し転向者の続出した時代に精神形成した人物として捉えることは可能であろうし、そこから幾分不鮮明ではあるものの、〈私〉と「革命」との何らかの関わりを類推することも可能であろう。このように捉えれば、「私と革命！ そのとりあわせの滑稽さ、奇怪さ」といった〈私〉の言葉や、作品冒頭での、

「この俺が主義者だつて。革命家だつて！」（中略）「奴等はどうして、そんな馬鹿げたことを考え出したのか。

など」など、この俺が何か政治的行動のできる人間だ

といった自嘲へと下降していく露悪的な語り口も、〈私〉の発する言葉どおり〈私〉と「革命」を全く無関係なものとしてではなく、かえつて逆の意味を持つもの、〈私〉と「革命」との結びつきをあらわすものとして解釈することができるのである。また〈私〉が「革命者」の青年に自己理想のイメージを投影していることがうかがわれる点も、こうした見方を補強するものとして捉えることができるであろう。

そして皮肉にも、その〈私〉が「革命者」として周囲から誤解されてしまうのである。〈私〉はその理由を同居人の村井の「放言」や自身の「顔つき」、「態度」によるものと見て

いるが、果たしてそれだけであろうか。まず「日僑集中地区」内における〈私〉の位置づけを確認してみよう。

「日僑集中地区」内における〈私〉の特徴としてまず挙げられるのは、〈私〉が中国語に堪能な「文化人」という点である。日本語、中国語の二ヶ国語を操る〈私〉は、その利点を活かして「代書」屋を営み、徐々に力（＝金）を得ていく。しかし一方で「文化人」であることによって、実際の行動や思想如何に関わりなく「ひそかに」「何事か企んでいる」人物と見なされてしまう存在でもある。この二点を備えている〈私〉が「日僑集中地区」内において特異な存在であることは間違いないだろう。

また重要であるのは、〈私〉を取り巻く環境の特殊性、つまり「日僑集中地区」共同体の特殊性である。本文中から、「日僑」らが敗戦後の残留生活を上海で維持しようとする際には、常に「日本人はなやかなりし頃の無茶なやり方で住みこんだ」「弱み」を意識せざるを得ない状況に置かれていることが分かる。かつては日本国、日本軍の影響下で力（＝権力）を行使し得た上海居留日本人は、終戦をさかいに後ろ盾を失う。内地（日本）への引揚げを待ちわびる「日僑」の多くは遠からず送還されることを見通してはいるものの、「恐怖が会元里の人々をつつんだ」、「後難をおそれ、みんな弱気」といった表現に明らかなように、旧敵国での残留生活に強い不安をおぼえている。いつか何事かが「ドカン」と来て、世の

中が変る」ことを願い、〈私〉のように「革命家でも、共産黨員でも、中国人なら誰でも知っている」とされる人物によって「世の中が変る」ことを期待する共同体を形成している。こうした共同体の中で、先述した特異な人物であることによって、〈私〉は無自覚のうちに周囲の脱日常願望の心理に添えていくことになり、結果、「革命者」と見なされてしまう。そうした周囲の風評に対し〈私〉が次のような反応を示している点には注意を払う必要があるだろう。

「奴等はどうして、そんな馬鹿げたことを考え出したのか。よりによって、この俺が何か政治的行動のできる人間だなどと」（中略）私は暗い裏部屋にきつぱなしの蒲団に横たわり、このようなおかしい評判をたてられたわが身を、一種の興奮、不安とも期待ともつかぬ興奮にかられながら、ふりかえって見ずにはいられた。

といった〈私〉の大仰な自己否定や、作中で繰り返し提示される「冷い笑」や「苦笑」からは、〈私〉が心中に何らかの問題を抱えながらその問題を意識的に回避している人物との印象がぬぐえない。また「よりによって、この俺が」といった言葉は、無論、〈私〉が「文化人」であることによって必然的に「革命者」と見なされてしまう事情に由来するものであるが、こうした〈私〉のありようを見る限り、単に自らの方向を見定めかねた、曖昧な状態にある人物と見なすことは難しいと思われる。また次の、

「また村井の奴、俺を宣伝して、何かのタネにする気だな。それもいいだろう」／今の私は自分で自分が何者であるか。つかむことさえ出来なかった。何者でもあり得ない男が何と思われようと、それでいいではないか。

といった〈私〉と「革命」を結びつける村井の「放言」を黙認してしまう場面も、「革命」をめぐる〈私〉のアンビバレントな心境を浮かび上がらせていよう。

〈私〉のこうした周囲の動向への黙認が、実際の〈私〉の力や「意慾」とは不似合い、不釣り合いな「奇妙な夢」を周囲に抱かせ、結果、〈私〉を「革命者」と信じて疑わない「革命者」の青年の登場へと繋がっていると考えられる。こうした〈私〉と「革命」の関わり方を見れば、一般的な生活規範からすればおよそネガティブなもの、「ニヒリスティック」なものとして受け取られがちな〈私〉の不明瞭な態度や〈私〉のまとう曖昧さこそが、「革命者」と疑われることに「不安」とも期待ともつかぬ興奮」を感じながら自身の曖昧なありようを自嘲する〈私〉と、実際の「革命」との接点点となり得ていることが理解できるのである。

本作の主題が「革命」から逃げ出した「非革命者」Ⅱ〈私〉のありようそのものにあることは、まず本作のタイトルから容易に推測し得るであろうし、また次に示すように、作中に「革命」をめぐる〈私〉の限界意識が明示される点にも明らかなであろう。その一つは、「非革命者」である〈私〉の目の

前で、〈私〉が想いを寄せる「M喫茶店の彼女」が「革命者」としての勇敢な死を迎える展開である。またもう一つは、作品末尾において〈私〉を「革命悲劇」から逃げ出させ、「力、ク、メ、イ」と呟かせた後、「それだけで、私の舌はしびれ、燃え、溶けるのを感じ」させ、これ以上言葉にするのは不可能であるとして語り終える展開である。こうした展開を見る限り、〈私〉の上海の暗い残像は、強い敗北感を伴い（今）現在も〈私〉に潜在していると予測されるのであるが、果たしてそうであろうか。この視点から次章では終盤の「革命悲劇」の場面描写を中心に検討する。

三

〈私〉のマイナスイメージを強く印象付けることから作品世界を開示し、「非革命者」Ⅱ〈私〉の「革命」をめぐる物語へと読者を誘い込む本作の展開は、〈私〉が初めて「M喫茶店の彼女」の〈真実〉——「M喫茶店の彼女」が、自室を訪れた「革命者」の青年と共に「革命」に関わる人物であったこと——を知る「革命悲劇」の場面で最大の効果を生んでいる。本章ではまず、語り手〈私〉が「M喫茶店の彼女」、「革命者」の青年、それぞれに向ける言葉に着目し、〈私〉、「M喫茶店の彼女」、「革命者」の青年の三者の関係を捉え直した上で、「革命悲劇」を再現し語る〈私〉の意識のありようを

考察していく。

まず語り手〈私〉が「M喫茶店の彼女」との関係を如何に語っているかを確認してみる。言うまでもなく、〈私〉の「M喫茶店の彼女」に対する感情は異性であることを意識した恋愛感情であるために、二者の関係を語る〈私〉の言葉はその親密さを強調するものとなっている。先述した、同居人村井の関わる階下の騒ぎを「俺とは無関係」と傍観する場面に端的にあらわれているように、作中での〈私〉は他者との距離を確保し周囲の動向に無関心を装う人物である。しかし「立ちすくむ彼女の表情をはじめ眺めた時、彼女の打明け話を聴かずして、すでに私には、それとわかった」といった語り方を見れば、〈私〉と「M喫茶店の彼女」の心的結びつきや不即不離の距離関係が〈私〉によって強く意識されていることは明らかであろう。

この「M喫茶店の彼女」が〈私〉にとって女性の魅力を渾然と凝縮した存在となっていく、その最大の要因が「M喫茶店の彼女」の混血性にあることは否めないであろう。〈私〉は「M喫茶店の彼女」の不幸な「混血児という運命」への同情から恋愛感情を自覚し始め、不幸な少女というイメージが〈私〉において自己喪失を思わせるまでの賛仰の姿勢へと至らせていく。こうした〈私〉の恋愛感情のあり方に関してさらに言えば、目の前の「M喫茶店の彼女」になりふり構わず惹きつけられていく主人公〈私〉の心理が滑稽に、或いは、

抒情豊かに語られており、「革命」をめぐる生きていくことの意味を問うていく本作の流れとは対照をなしている。

当初自身の無力さを自覚し「M喫茶店の彼女」の不幸な現状との関わりを諦観していた〈私〉は、力(Ⅱ金)を手に入れた瞬間より「M喫茶店の彼女」との新たな関係を意欲し始める。しかし同時にそれは〈私〉を「革命悲劇」の現場に遭遇させ、自身を「非革命者」として強く自覚させる結末へ導く要因ともなっている。

続いて、「革命者」の青年が初めて〈私〉の自室を訪れた場面の描写から、〈私〉と「革命者」の青年の関係を確認してみる。

戸を開くと、青白い夕暮の光と共に、背の高い藍衣の青年が私の眼前にあらわれた。／「失礼ですが、あなた杉さんですね」と彼は上海語でたずねた。「杉ですが、何か用ですか」と私は北京語で答えた。

ここでは、「革命者」の青年の用いる「上海語」と〈私〉の用いる「北京語」の提示によって、二者の対比が強調されている。作中には、〈私〉が「上海語」をどの程度理解し得る人物であるのか、明確な説明はない。しかし〈私〉が、ゴロツキによって「陰悪な上海語」が叫ばれる状況を理解、把握している場面が見られる点や、「M喫茶店の彼女」の話す「流れるような上海語」を理解できていると思われる語り方をしている点に目を向ければ、中国語(「北京語」)に堪能な人物

とされる〈私〉が、この場面で「革命者」の青年の発した「上海語」を理解するに十分な程度には「上海語」を習得できていた人物であったと考えることができる。

このように考えると、「上海語」を用いる「革命者」の青年に対してあえて「北京語」で応じる〈私〉の言動を、「革命者」の青年を警戒し、青年と自身との距離を確保しようとする意識的な行動であったとして解釈することも可能であろう。この〈私〉のふるまいは「信頼し切った、学生仲間」に於ける「気やすさ」で〈私〉に接する「革命者」の青年とは対照的である。

こうした形で始まる二者の関係は、さらに続く場面で、「微笑」しつつ「革命」運動の「秘密」を語る「革命者」の青年と、「苦笑しながら」「いらだたしげに」話を聞く〈私〉といった、対照性を強調する関係を形作っていく。このような二者の描き方は、「革命者」の青年と〈私〉の差異を浮かび上げさせ、その差異に導かれるようにして後に展開する「革命悲劇」との遭遇や、捕縛される「革命者」の青年と恐れ慄き逃げ出す「非革命者」の〈私〉の提示といった結末へと繋がっていく。

ここで、先にふれた、「M喫茶店の彼女」、つまり最終的には「革命者」としての死を迎える「M喫茶店の彼女」が、「流れるような上海語」を話す人物として語られていた点に着目してみると、「革命者」の青年と〈私〉の関係に見出された

対照性を強調する関係を、「M喫茶店の彼女」と〈私〉の関係にも見出すことが可能であると理解できよう。このように、本作の描写の細部に着目しながら「革命悲劇」に関わる〈私〉と「革命者」の青年、〈私〉と「M喫茶店の彼女」の関係を捉え直してみると、「革命者」である青年と「M喫茶店の彼女」の造型にはそれぞれ、「非革命者」である〈私〉との対照性を意識させる要素（Ⅱ「上海語」を用いる人物であること）が付与されていることは明らかである。

こうした形であられる「革命者」と「非革命者」の対比的な位置関係を、意図的に描き分けがなされた結果として捉えるならば、本作終盤の「革命悲劇」以降あらわれてくる「革命者」と「非革命者」の絶対的な相違も、その場面に至る以前から、語り手〈私〉の言葉の中に暗示的にあらわされていたと見なすことが可能であろう。また同様に、作中で「M喫茶店の彼女」がまさに「革命者」らしからぬ人物として語られている点も、やがて明らかにになる「M喫茶店の彼女」の（真実）に対する意識的な回避として、或いは、恋愛に耽溺し「M喫茶店の彼女」を正確に見ることができなくなっている〈私〉の滑稽さを浮き彫りにするために設けられた視座として、解釈することが可能であろう。とすれば本作は、語り手が表立って語る内容のみならず、語る過程で洩らされる細部が重要な意味を持つ小説として捉えることができるのである。

こうした後の展開に関わる周到な布石を意識しつつ、〈私〉

の語りを相対化する視座から、さらに「革命悲劇」の場面を検討してみる。

作中では、「M喫茶店の彼女」と「革命者」の青年の關係に關して詳細な説明は見られない。しかし「革命悲劇」を再現し描写する〈私〉の語り方に着目することによって、〈私〉が二者を單なる「革命」の同志の關係として捉えていないことが推測される。

兵士に包圍され、地面に伏してしまつた青年は何か叫んだ。それは、悲しげな、若々しい、感情に富んだ声であつた。(中略)その声に應ずるように、ガラス戸が開かれ、ヴェランダの上に、さきほど別れたばかりの彼女の姿があらわれた。(中略)私がついにその時まで知らなかつたほど、意味ふかく、しかも完全に、彼女は彼女らしく見えた。髪は乱れ、銃をにぎり、肩つきはいかめしかつたのに、しかも彼女は、たよりなげに、いつも寸分たがわずたよりなげに見えた。／(彼女はたしかに、兵士を射殺するためより、青年を救うために発射していた。それは乱れ、仕方なしに発射されていた。と私は後に考えたのであるが)

とある。〈私〉が二者の關係に戀愛關係と捉えていることがうかがわれよう。「M喫茶店の彼女」と「革命者」の青年を戀愛關係にあつたと見なすこと。このことが「M喫茶店の彼女」に想いを寄せる〈私〉にとつて痛みとなることは間違ひ

ない。しかしひるがえつてみれば、もし両者が戀愛關係にあつたのだとすれば、死の間際の「M喫茶店の彼女」の心は〈私〉ではなく「革命者」の青年にあつたことになり、その死に對して「革命」から逃げ出した〈私〉が負い目や責任を感じる必要はなくなる。先述したように、〈私〉は「革命悲劇」の場面を語る際、「M喫茶店の彼女」の死にゆく様子を、正確さを意識しつつ、後の時間からの視點をも導入し再現していた。しかし同時に、「M喫茶店の彼女」と「革命者」の青年の結びつきを語る〈私〉の言葉には、「私にとつて唯一の未來」であつたはずの「M喫茶店の彼女」の死に對して距離をとろうとする〈私〉のそぶりさえあらわれているのである。こうした語り手〈私〉の言葉の背後に「革命悲劇」から逃げ延び生き残つた負い目を振り切ろうとする〈私〉の内面的苦澁を読み取ることが可能であらう。

ここで改めて、〈私〉が自身の〈恥〉を強調する一方でその理由を明示しない語り手であつたこと、「革命」に對する何らかの関わりを予測させるような反応を示しながらも、「革命」との関わりや自身の過去を曖昧にして語らない語り手であつたことを思い出したい。こうした語り方から、〈私〉の脆弱さや曖昧さを連想することは容易であらう。しかしさらに、先述した武田作品における引揚げの意味や、「革命悲劇」を再現し描写する〈私〉の語り方に着目して考察を進めた結果、本作の語り手〈私〉は、自身の体験を語る際に一貫した

相応する言葉を選択するという理路整然とした志向性を有していない語り手として、或いは、自身の語りの二面性や振幅の大きさを自覚し得ない語り手として、意図的に構想された語り手であったと捉えることが可能なのである。

おわりに

《私》と、《私》によって対象化される他者「M喫茶店の彼女」との関係が中軸となつている本作において最大要件となつているのは、終盤に至つて「革命者」としての勇敢な死を迎える「M喫茶店の彼女」が、強烈な存在感を伴いつつ「非革命者」Ⅱ《私》の卑小さを浮き彫りにする点であろう。しかし「M喫茶店の彼女」は、単にそういった意味にとどまる存在ではないのではないか。

本作とほぼ同時期に執筆された武田の『谷崎氏の女性』（『芸芸紙』一九四七・二）を見れば、小説中に女性を描くことが「男の濁つた思想、いいかげんな妥協、結末へ行きつかないう論理や倫理の世界を批判」することへ繋がる、といった認識を武田が有していたことが分かる。本作においても「M喫茶店の彼女」は、「革命」をめぐる揺らぐ主体としての《私》に対し、断罪者として機能しながら、挫折感、劣等感といった心的重圧を加える存在として、さらには《私》に限界点を確認させる機縁として体现する存在でもある。換言すれば、

「M喫茶店の彼女」は、「革命」をめぐる《私》の理想やなすべき行為を、それまでの総体の中でつぶさに省みさせる契機をもたらす存在として重要な役割を果たしている。

また、「M喫茶店の彼女」という小説中での呼称それ自体が明示しているように、「M喫茶店の彼女」の造型には具体的な輪郭の不鮮明さが看取されるが、この点にも作者武田によって構想された象徴的な存在としての「M喫茶店の彼女」の役割を確認することができよう。

一方で、本作において「革命」がキーワードとなつている点、本作の発表時期が一九四八年である点に目を向ければ、本多秋五が指摘したように（『文化人』Ⅱ《私》）を「非革命者」として描く本作を、戦後の民主主義革命や便乗主義の横溢する社会や文壇の状況に対する武田の態度表明と結びつけることも可能であろう（『』）。しかし留意すべきは、武田自身と「革命」との距離関係が本作末尾の「ドン底」まで落ちた《私》の提示を通して、単純にあらわされていたのではない点である。本作の主眼としてむしろ読み取るべきは、これまで本論が主張してきたように、作品全体を通して語り手《私》の「自覚」の曖昧さや脆弱さに対する、裏がえしの批判が意識的に行われていた点である。語り手《私》が物語世界の状況を如何に語ったのか、あくまで小説の細部描写に着目し読み込むことによつてはじめて一編の主題を浮かび上がらせる表現方法が用いられている点にこそ、本作の独自性を

見出すことができるのである。

注

(1) 本多秋五「武田泰淳」(『週刊読書人』一九六〇・八)一九六三・二、石原正人「武田泰淳論——風媒花まで——」(『日本文学』一九六七・三)、山崎正純「敗戦」後文学論(二)——武田泰淳と上海——(『百舌鳥国文』二〇〇三・三)など。

(2) 山崎正純(前掲論)は(上海もの)作品における主人公(杉)の系譜を示し、『非革命者』の(杉)を「才女」から数えて五番目の杉」と位置づけている。

(3) 浦和高校在学中「Aと呼ぶ反戦グループに入」(『禁欲の青春』「小説現代」一九六八・七)って行動し、東京帝大入学後も中央郵便局にゼネスト呼びかけのピラをまきに行き逮捕され、留置所拘禁をうけたことが知られている。

(4) 本多秋五 前掲論

(5) しかし、本作の(私)が反「革命者」としてではなく、あくまで「非革命者」であつたと同様に、武田自身も「新日本文学会などの革新的文学運動にたいしては、支持するでもないしないでもないドッチツカズの態度」(戦後派作家対談2 武田泰淳篇『図書新聞』一九七〇・一・一において、武田が肯定している対談者古林尚の発言)といった曖昧さを見せている。

【付記】本文の引用は筑摩書房刊『武田泰淳全集第二巻』(一九七一・六)に拠った。

また本論は、大阪大学国語国文学会(二〇〇五・一・八)における口頭発表に基づき、加筆・訂正を施したものである。発表に際し、先生方ならびに会員諸氏に貴重なご意見をいただいた。ここに記して深く感謝の念を表したい。

(まつもとようこ／本学大学院博士後期課程)